東公民館 第8回出作文化祭を終えて

出作分館主事補　松本宗教

今回は出作文化祭を紹介させていただきます。

出作の文化祭は集会所の中と外の両方を使って展開されます。まず集会所の中においては、出作の幼児から中学生までの力作と出作在住の一般の方々から募った多彩で素敵な作品が所狭しと展示され、さながら即席の美術館と化し、足を運ばれた方々の目を楽しませてくれました。外の集会所グラウンドでは、うどんやいなり寿司、よもぎ餅やフライドポテト、缶ビールやジュースといったにわか仕立ての露店が立ち並び、バザーが人々の興味を引きます。出作農家の青空市場が新鮮野菜を並べて彩りを添え、獅子舞いが雰囲気を盛り上げ、大勢の方々の活気であふれていました。

▼多種多様な作品の数々

また、グラウンド中央に設けられたやぐらの上に町長や教育長といった来賓の方々がのぼられ、大勢の方々がグラウンドを埋め尽くし、盛大に餅まきが行われました。

この出作の文化祭、その特色を一言で表現するならば、それは「和」の一言に尽きるのではないかと思われます。

餅つきをはじめ、準備をすることは大変な作業であるにもかかわらず、たくさんの方々が助け合い協力しあって成し遂げ、それを皆とともに喜び合い、楽しみを分かち合う。まさに「和」という一字をもって表現することが何よりふさわしいのではないかと思われます。

地元住民の交流と親睦を深めるための公民館活動、その意義を十分に果たした出作文化祭であったことを、ここに紹介させていただきます。

▼獅子舞で、いっそう雰囲気が盛り上がります。

人権・同和教育シリーズ 第230回

Hさんの優しさから

岡田小学校同和教育主任　重川尚子

9月下旬、私のクラスの子どもがけがをして手当てをしたと、病院から学校に連絡がありました。駆けつけると、Hさんという方が病院へつれてきてくださったとのことで、ていねいにお礼を申し上げ、しばしお話をさせていただきました。

道路に倒れている子どもをみたHさんは、そのままにしておくと当然危険であること。さらに、ご自身が幼少のころけがをしたとき、十分な治療もできずに苦労されたことなどを思い出し、子どもの辛さを感じ、とっさに抱き起こして病院へ駆けつけてくださったとのことでした。

私はお話の中の「子どもの辛さを感じ…」というHさんのお気持ちに、頭の下がる思いがしました。

とかく、私たちは、足をふむ立場、ふんでいる側の立場から物事を考えたりみたりしていたのですが、これでは本当のふまれた方の気持ちは理解できないでしょう。

同和問題も同じことだと思います。同和問題を学ぶということは、差別の現実を知り、社会的な認識を深めるだけでなく、私たちの誤った認識を正し、ひいては一人の人間として、ものの見方や考え方を変革させることにあります。相手の立場に立ち、被差別の立場におかれていた方々の立場に立ち、足をふまれて痛みを感じている方の立場に立って、冷静に社会を見つめ行動できるよう改めなければなりません。

さて、私はクラスの子どもたちと「人に優しく、自分に厳しく」を合言葉にしています。「自分に厳しく」も「人に優しく」も勇気が必要です。けがをした子どもに対するHさんの勇気ある優しい行動を、翌日クラスのみんなに伝えたことは言うまでもありません。

Hさんのお考えと行動は、同和教育に必要不可欠なものではないでしょうか。Hさんの勇気と優しさをクラスの子どもといっしょに広めていきたいと思います。